

生活単元学習で「深める」学び

～教科学習と日常生活とを関連付けて学ぶ授業の具現化～

茨城大学教育学部附属特別支援学校 教諭 菅原 透・小野 貴史

I 実践に当たって

本校は、茨城県の中央部に位置し、知的障害のある児童生徒を対象とした国立大学法人茨城大学教育学部の附属特別支援学校である。小学部、中学部、高等部があり、全校児童生徒数は50名弱と、茨城県内では規模の小さい特別支援学校である。今回の実践は、中学部生徒14名への生活単元学習の実践を紹介する。

生活単元学習は、各教科等を合わせた指導であり、児童生徒が生活上の目的を達成したり、課題を解決したりするために、一連の学習活動を組織的・体系的に経験することによって、必要な事柄を実際的・総合的に学習するものである。単元では、広範囲に各教科等の目標や内容が扱われ、さまざまな教科を関連させながら児童生徒の目標を達成していくことが求められる。

これまでの生活単元学習は、経験主義的な部分があり、生活の中で活用できる内容や生活に役立つ経験を積むことが学習の中心として位置付けられてきた。しかし、新学習指導要領の改訂により、教科の在り方に目が向けられるようになり、教科相互の関連性を踏まえつつ、各教科の特性に応じた見方・考え方を生かしたり、働かせたりすることができる学習をするとともに、今後、社会で生活していく上での資質・能力を育成していくことが求められている。新学習指導要領における各教科等の目標・内容は、「(ア)知識・技能、(イ)思考力・判断力・表現力等、(ウ)学びに向かう力」という順に示され、児童生徒が「知識を身に付けてから、生活の中で使う」というプロセスを中心に考えられている。一方で、知的障害教育の教科である「生活科」の内容の示し方は、前述した順とは異なり、「(ア)思考力・判断力・表現力等、(イ)知識・技能」の順に示されている。つまり、「生活科」に示されている「内容」は、実社会や実生活の中で、考えながら、「身に付ける」という特徴がある。特別支援学校学習指導要領解説にも、知的障害児には「抽象的な内容の指導よりも、実際的な生活の場面の中で、具体的に思考や判断、表現できるようにする指導が効果的である」と示される通りである。

特別支援学校に在籍する児童生徒への学習内容の般化については、「日常生活における体験や経験値の不足」や既習内容を横断的に生活の中で自発的に生かしていくことに難しさがあるという点を鑑みても、これまでの生活単元学習が担っていた役割は大きく、単に教科で学べばよいという問題でもないと考える。

一方で、普段の生活単元学習の教材研究場面や授業場面を振り返ってみると、取り扱う単元について、教師間で教科的な視点や教科との関連に対する意識が薄く、例えば、季節単元等の体験の中で生活経験を積む単元内容が中心となっていたり、行事の「事前学習」や「準備」等の目的のみで単元計画が設定されていたりすることが課題であり、その他、以下のような課題点が挙げられた。

- ①教科的な視点や教科との関連に対する意識が薄い。
- ②単元計画が適切に計画されているか。
- ③行事の事前学習やその準備という目的のみで単元計画が設定されている。
- ④生徒同士の学び合い(互いの学びを見る、一緒に考える、共有する)ができていないか。
- ⑤生徒からの発信を拾い、他の生徒につなげる難しさ。

そこで、生活単元学習にも、各教科の視点や教科同士の関連を明確にしながら学習内容を計画し、授業を実践することができれば、生活単元学習による学習効果を高めつつ、生徒の学びをさらに深めることができるのではないかと考え、今回実践を行うこととした。

II 実践内容

「自分らしく未来を生きる力を育てる授業づくり」というテーマで、生活単元学習の授業を実践した。今回は、「A中学校と交流をしよう」という単元での実践を紹介する。

1 授業計画について

授業計画に際しては、以下の点について、教師間で協議し、共通理解を図った。

(1) 協議した内容

① 「生活単元学習の単元を通して、どのような力を身に付けさせたいか」

生徒の実態から現時点で必要な力や将来的に身に付けさせたい力を考え、一人一人の目標を明確にした。また、「自分なりに考える力、伝える力、受け入れる力」の三つの力についても、授業実践する上で大切なキーワードとすることを共通理解した。

② 「何のためにこの単元を実施するのか」

年間計画や小単元をどのように構成していくか、各教科と連携させながらどのように指導していくかを協議し、単元を計画した。

③ 「各教科との横のつながりはどうなっているか」

単元を実施するにあたっては、各時間の略案に加え、単元の内容と教科の目標がどのように関連しているかを表に示し、学習指導要領をもとに教科の目標や学習すべき内容を記載した。(表1参照)

単元名：A中学校と交流しよう(1学期)	生活単元	国語・英語	算数・音楽	社会科・家庭科	外国語・道徳
<p>単元目標</p> <p>①自分らしく生きていく力を身に付けたい。</p> <p>②自分らしく生きるために必要な力を身に付けたい。</p> <p>③自分らしく生きるために必要な力を身に付けたい。</p>	<p>・ビデオレターを基に、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・ビデオレターを基に、相手の生活の様子を知る。</p> <p>・ビデオレターを基に、相手の生活の様子を知る。</p> <p>・ビデオレターを基に、相手の生活の様子を知る。</p>	<p>・国語の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・英語の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・算数の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・音楽の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p>	<p>・社会科の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・家庭科の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・道徳の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p>	<p>・外国語の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・道徳の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p>	

表1 単元計画と各教科との関連

単元名：A中学校と交流しよう(1学期)	生活単元	国語・英語	算数・音楽	社会科・家庭科	外国語・道徳
<p>単元目標</p> <p>①自分らしく生きていく力を身に付けたい。</p> <p>②自分らしく生きるために必要な力を身に付けたい。</p> <p>③自分らしく生きるために必要な力を身に付けたい。</p>	<p>・ビデオレターを基に、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・ビデオレターを基に、相手の生活の様子を知る。</p> <p>・ビデオレターを基に、相手の生活の様子を知る。</p> <p>・ビデオレターを基に、相手の生活の様子を知る。</p>	<p>・国語の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・英語の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・算数の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・音楽の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p>	<p>・社会科の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・家庭科の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・道徳の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p>	<p>・外国語の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p> <p>・道徳の授業の中で、自分の生活の様子を伝える。</p>	

表2 授業略案

2 授業について

(1) 単元構成について

本単元は、「A中学校との交流学習(ビデオレター)」を基に、自分のことについて考えたり、気付いたりすることを目標とした学習である。また、新学習指導要領のキーワードでもある、「主体的・対話的・深い学び」も念頭においた授業構成となっている。交流学習を主たる目標とした単元計画を立てるのではなく、交流学習を基に、自分のことについて考えたり、気付いたりすることを目標としている点が、各教科との関連を考え、さらに深い学びへの工夫をしている点である。単元構成については、表1の通りである。A中学校には、ビデオレターの内容を、自己紹介を兼ねて、得意なこと・不得意なことをやり取りできるように依頼した。

(2) 授業実践について

今回は、小単元「自分ってどんな人?(1時間/3時間扱)」の授業場面を紹介する(表2参照)。本授業の目標は、①人には様々な面があることに気付くこと(知識・技能)、②自分の苦手なことについて考え、伝えること(思考力・判断力・表現力等)、③友達からの意見を受け入れ、自分について考えようとする(学びに向かう力・人間性)である。

- ・アニメキャラクターの良いところについて考える。

アニメキャラクターを提示し、そのキャラクターの良いところだけではなく、苦手な部分や不得意な部分に生徒たちの目が向いたとしても受け入れることで、その後の「自分の苦手」を考えられるようにした。生徒たちは、自分もつキャラクターのイメージから、活発に意見を出していた。

- ・自分の良いところについて考えて発表する。

生徒は、学校生活場面や家庭生活場面を想起し、「漢字を書くのが得意。」や「手伝いが得意。」「サッカーが得意。」など、得意なことについて考えて発表ができた。得意なことが思いつかない生徒には、友達が「Bさんはみんなに優しい。」など、普段の友達の様子を見て伝える様子が見られた。

- ・自分の苦手なところについて考えて発表する。

苦手なところについて考えることについては、教師間で議論を多く行った。今までは、教師自身も、苦手なことに目を向けてこなかったこともあり、引き出すことが難しいと考えた。しかし、TTの関わりや連携により、引き出すことができ、そのことが、「変化に対応する力」につながると共通理解をした。実際の授業場面では、教師自身の発表を参考にしたり、日々の生活場面を想起できるような発問をしたり、生徒からの発言を受容しながらやり取りすることで、それぞれの生徒の実態に応じて、苦手なことを考えることができた。

- ・意見交換をする(話し合い)。

黒板に表を作成し、付箋紙を貼りながら意見をまとめた。教師間では、TTを効果的に活用しながら、生徒の意見を受容したり、関連付けたりした。この意見交換を通して生徒は、友達の新たな一面を知ったり、自分の意見と似た意見を知り、勇気付けられたりする生徒の様子が見られた。

Ⅲ 成果と今後の課題

本実践の成果として、生活単元学習の单元の中で、教科学習がどのように関連しているかを明確にすることで、単元で目標としている内容が教科とどのように結び付いているのかが、教員間で意識できるようになった。書く場面などでは、生徒個人の目標や国語科の観点を教員が意識しながら、目標達成に向けて一貫した指導を行うことができた。また、単元の中で、生徒が興味をもった内容や達成が難しかった内容等をそれぞれの教科で題材として取り上げるなどの取組も見られた。

単に、学校間交流として学校紹介のビデオレターのやり取りだけにとどまらず、国語科や社会科、体育科など、改めて教科との関連を意識して授業計画を立てると、単元計画の真の目標や、各小単元での目標の系統性、妥当性を意識することができた。

しかし、実践をする中で、生活単元学習からの視点で、各教科とのつながりをとらえることに取り組んでみたが、各教科で学んだ知識を技能として生活単元学習で生かしていくという視点には至らなかったことに気付いた。

今後の課題としては、生活単元学習の魅力である「体験を中心とした学習の部分」と、教科で学ぶべき「知識的な学習の部分」を往還しながら、学習計画や実践を行うことが必要であると考え。例えば、防災教育を例として考えてみると、「防災教育」を大きくとらえれば、生活単元学習的に体験を通して学ぶべき内容である。しかし、地震等の災害をいつでも体験できるわけではなく、災害時を想定して再現する実践にも限界がある。また、地震のメカニズムや震源などのいわば知識に関する内容については、言葉では知っていても、その本質については生活の中のみで理解できる内容ではない。そのように考えると、生活単元学習の中で、教科の見方・考え方を生かしたり、働かせたりする学習を実践していき、体験的な学習と知識的な学習とを結び付け、より理解を深めていくことが必要であると言える。このようなことから、生活単元学習の今後の在り方として、各教科で深い学びを実現しつつ、生活に基づく体験的な学習と連携し、往還しながら生活単元学習を実践していくことが今後の課題となるのではないかと考える。